

## 第百八十四話 敵将の日本軍評！

大東亜戦争で日本軍と最も長く戦い、そして戦後に日本に計り知れない影響を及ぼした敵将は、言う迄もなくマッカーサー大将である。日本とは因縁浅からぬ敵将である。

彼が、日本軍との熾烈な戦いを通じて感得した日本軍評は辛辣である。耳を傾けることも必要であろう。



### 1 マッカーサーの日本軍との戦歴

- (1) 比島 1941/12/8 ~1942/5 下旬 マッカーサーは、大統領の命令により、比コレヒドールからケソン大統領共々豪へ脱出(3/11)した。“I shall return” 彼は豪州では大歓迎された。脱出は彼の人生にとって最大の汚点だ
- (2) 1942/4/18 南西太平洋方面最高司令官に任命  
太平洋戦域を担当する米国は海軍に統一指揮を任せる積りであったが、マッカーサーの人気、強烈な個性、最先任でもあって、戦域を二分せざるを得なかった。マッカーサーにはニューギニアからフィリピンへのルートを、一方ミニッツ太平洋艦隊司令長官には、ソロモン諸島からマーシャル、マリアナ諸島、硫黄島のルートが予定された。マッカーサーは豪州にあって、日本進攻を準備する。  
(注) ミッドウェー海戦(1942/6/5) 後、先ずミニッツ隷下部隊がソロモン諸島域で反攻を開始し、8月7日その隷下第一海兵師団がガダルカナル島に上陸する。ソロモン海戦やガ島の死闘が続く。
- (3) マッカーサーは、ニューギニア防衛作戦を指揮しつつ、戦力増強を受けて1943年9月反攻作戦を開始した。翌1944年8月にニューギニアでの勝利を確実にしたマッカーサーに、やっと比への道が開けた。安達中将の18軍は9カ月米軍を足止めした。マ大将にとっては想定外であり、米国の戦略にも多大な影響を与えた。
- (4) マッカーサー率いる米軍は、1944(S19)年10月20日レイテ島に上陸し、1945(S20)年3月にはマニラを占領した。執念の比帰還であり、マッカーサーは無念を晴らした。
- (5) 1945/5/25 米統合参謀本部は、マッカーサーにオリンピック作戦(九州進攻作戦)命令を発した。(ミニッツは硫黄島戦~沖縄戦)
- (6) 1945/8/14 トルーマンは、マッカーサーを連合軍最高司令官に任命
- (7) 朝鮮戦争最中の1951(S26)年4月11日、マッカーサーはトルーマンにより解任された。

### 2 マッカーサーの日本観

日米戦開戦劈頭の日本軍航空機の活躍を見て、人種差別的発想から日本人を見下していたマッカーサーは、「戦闘機を操縦しているのは、(日本と同盟国の)ドイツ人だと信じ、その旨を報告したとされる。また、解任帰国後の、議会証言での日本人12歳論もある。本稿の趣旨ではないので、これらには深入りしない。

### 3 「マッカーサー大戦回顧録」(中公文庫)に見る日本軍評 (上巻244p)

『日本軍の地上部隊は、いまなお、恐るべき頑強さで戦っている。日本軍の兵員の素質は依然として最高水準にある。しかし、日本軍の将校は上級ほど素質が落ちる。日本の将校団は、基本的に階級主義と封建的な制度で成立っており、厳密な職業的能力によって選ばれていない。ここに日本の弱点がある。日本の息子たちは心身ともにたくましいが、指導者に欠けている。』耳の痛い話である。

確かに、陸海軍の指揮を統一し、陸、海、空の立体作戦を考案遂行し、制空権を確保しての蛙飛び作戦で日本軍を翻弄し、無能とみれば作戦中でも指揮官を交代させる等の厳しい実績主義(日本は温情主義?)等の米軍は、正に戦う組織であった。

\* 全面的にマッカーサーの評に同意する訳ではないが、・・・

(第百八十四話 了)